

シャミッソーと小説『ペーター・シュレミール の不思議な物語』

田村 百代

I はじめに

アーデルベルト・フォン・シャミッソー(Adelbert von Chamisso) (1781~1838)は、ドイツの詩人として、また大旅行を行った植物地理学者としても広く知られている。彼は1813年に小説『ペーター・シュレミールの不思議な物語』¹⁾(以後『ペーター・シュレミール』に省略)を書き上げた。ドイツ・ロマン主義文学の代表作に数えられているこの作品は、日本においては『影をなくした男』の名で親しまれている²⁾。その後、彼は1815年から3年間にわたってコッツェブー(Kotzebue, O. von)船長の率いる世界一周航海に参加した。帰国後は植物園や王立博物館に勤務しながら作詩を行い、同時に旅行記や植物地理学を含む植物学関係の多くの研究を発表した³⁾。

文学から自然研究に至るまでの幅広いシャミッソーの活躍は、ドイツ文学はもちろんのこと、地理学史の分野においても早くから注目され、ヘットナー(Hettner, A.)⁴⁾、ベック(Beck, H.)⁵⁾などの著書で取りあげられている。とくにベックの研究では、シャミッソーが世界旅行中に行った自然観察について詳細な報告がなされている。最近ではシュニーベリ-グラフ(Schneebeli-Graf, R.)⁶⁾によって、シャミッソーの植物地理学は19世紀初期としては珍しく、世界のフロラ地域(Florengebiete)の記載であったことが明らかにされている。しかしベックやシュニーベリ-グラフの研究では、影をなくした男が世界の自然を調査して歩くという小説『ペーター・シュレミール』に関しては、その内容が詳しく紹

介されているだけで、この作品のもつ地理的意味までは考察されていない。一般にドイツ・ロマン派文学の特徴の一つは、現実から遊離した内容と、学問研究に対する関心という二つの側面を備えている点にあるといわれている⁷⁾が、ドイツ文学における『ペーター・シュレミール』の研究でも、主人公のシュレミールが世界の自然を調査して歩くことについては、後述のように十分な分析がなされていない。これらの点を考慮し、本稿においては地理学史の分野から小説『ペーター・シュレミール』の考察を試みた。

II 植物地理学者としてのシャミッソー

シャミッソーはフランスの貴族の家の出で、1781年にシャンパーニュ地方のボンクール城(Schloss Boncourt)に生まれた。しかしフランス革命の波は、後にシャミッソーによって「城内の泉のほとりにはスフィンクスがあり、イチジクの木が生い茂る⁸⁾」と詩に歌われたボンクール城にまで及んだ。城を破壊されたシャミッソー一家は1790年以来オランダ、ドイツ南部などを転々とした末、ベルリンに落ちつくことになる。1796年に少年シャミッソーはヴィルヘルム II 世王妃の小姓となり、98年以降はプロイセンの軍隊に入った。家族がフランスへ引き上げた後も彼だけはベルリンにとどまり、軍人としてヴィルヘルム III 世に仕えた。その後ナポレオン戦争に参加して祖国フランスと戦い、1806年にはハーメルンで捕虜となった。解放されると彼はフランスへ戻ったが、翌1807年にはベルリンへ帰っている⁹⁾。さらにもう一度1810年にフランスへ行き、こ

の時にはアメリカ旅行を終えてパリに滞在中のフンボルト (Humboldt, A. von) を何度か訪ねている。シャミッソーによると、フンボルトは旅行の成果をまとめることに多忙であり、またこの頃すでに中南米の高山地域と比較する意味で、チベットを中心としたアジアへの旅行を望んでいた¹⁰⁾。そしてついにシャミッソーは、生まれ故郷のフランスではなく、プロイセンを祖国に選び、1812年にはベルリンへ帰った。その後は1810年創立のベルリン大学において、植物を中心とした自然科学の研究に没頭した¹¹⁾。

シャミッソーは小説『ペーター・シュレミール』を1813年に書き、この原稿を同じくフランス系ドイツ人であり、ロマン派の作家でもある友人フケー (Fouqué, F. de la Motte) に預けた。翌14年にフケーは、シャミッソーには無断でこの物語を出版した¹²⁾。

1815年にシャミッソーは、コッツェプー船長の指揮するロシアの探検船「ルリク号」に公式の自然研究者として乗り込む機会を得た。ルリク号はベーリング海峡と、この海峡に続くアメリカ西海岸を調査するため、1815年7月にザンクトペテルスブルクを出航した。ヨーロッパを離れたルリク号は、赤道を越えてブラジルのセントカタリナ島に到着した。シャミッソーはここで初めて繁茂する熱帯植物を観察し、その豊富さに驚いている。ルリク号はさらに南下し、チリをまわって太平洋にぬけて、太平洋の島々を巡っている。そしてラタカ群島をあとに北上し、カムチャツカを過ぎて1816年8月にベーリング海峡を越え、コッツェプー海峡やシャミッソー島などを発見した。シャミッソーにちなんで名づけられたこの島で、彼は初めて永久凍土を観察している。その後南下し、ウラナスカ島からサンフランシスコを経て、ハワイ諸島・ラタカ群島から再度北上しウラナスカ島へ到達している。そして再び太平洋の島々を巡り、フィリピン諸島や、ジャワ島・スマトラ

島などに立ち寄り、マダガスカル島の南を通過して喜望峰をまわり、セントヘレナ島からサルガッソー海を越えて、1818年8月にザンクトペテルスブルクへ帰港した¹³⁾。

3年間にわたる世界周航中、シャミッソーは「植物学者として、さまざまな種子や植物を採集した¹⁴⁾」。この旅行で彼が採集した植物の種 (Art) は2,500にも達し、このうち三分の一はヨーロッパでは未知のものであった。また彼は、観察した地域のあらゆる植物の種のリストを作成し、調査地域のフロラを把握しようと努めた。彼によるとこうしたリストの作成は、植物地理学の研究を考慮してのことであった¹⁵⁾。世界周航中に彼が詳細な植物観察を行った地域は、大きく二つに分けることができる。一つはベーリング海峡周辺の地域であり、もう一つは南太平洋の島々である。

帰国すると、フケーが無断で出版した『ペーター・シュレミール』は好評を博し、その著者が誰であるのか取りざたされていたという¹⁶⁾。シャミッソーは蒐集してきた鉱物・動物をベルリン大学へ寄贈し、植物については彼自ら直ちに分類を開始した¹⁷⁾。旅行中の植物関係の成果は、その後多くの論文や旅行記にまとめられた。1827年には著書『植物学と植物界についての諸相』が発表され、彼の植物地理学を含む植物学に対する見解が明らかにされている。

III 『ペーター・シュレミール』の内容

シャミッソーは小説『ペーター・シュレミール』を1813年の夏休みに書き上げたという。次にこの物語の内容と、ドイツ文学界での評価について簡単にみておきたい。

小説『ペーター・シュレミール』は、主人公のシュレミールが彼の友人であるシャミッソーに預けた手記という形を採用している。ある日シュレミールは、金貨の出てくる袋と交換に悪魔に自分の影を売

ってしまう。影をなくしたシュレミールは、富を得ることはできたが、影を持たないがゆえに人間の社会からは締め出される。影を取り戻そうとするが、次に悪魔は影と死後の魂との交換をもちだしてくる。その後シュレミールは、神は生によって死後の人間の魂を裁くことを知り、影を取り戻すことをあきらめ、不正に手に入れた富をも捨てることを決心する。影と富とを失い、地上でみなに相手にされなくなったシュレミールは、地下の仕事に従事しようと鉱山へ向けて出発する。その途中で、傷んだ靴のかわりに中古の長靴をもとめたところ、それが一步あるけば7マイル進むという「七里靴 (Siebenmeilenstiefel)」であった。不思議な七里靴を手に入れたシュレミールは、その後はこの長靴をはいて世界を広く歩きまわり、植物の観察を中心に、気温・高度・地磁気・温泉の測定、動物の調査などの自然研究に精神的な拠り所を見出ししていく。

ドイツ文学の分野においては、シュレミールが失った影とは何を意味しているのかという点にのみ関心が払われてきた¹⁸⁾。この問題は『ペーター・シュレミール』が出版された1814年以来多くの人々によって取りあげられ、シュレミールが失った影とは、①シャミッソーの失ってしまった祖国や、②市民生活を営むために必要な人間的な結びつきを意味するとされている。影を失ったがゆえに市民社会から疎外されるシュレミールの姿は、フランスを追われ、やっと落ち着いたベルリンでは、プロイセンの兵士としてフランスと戦わなくてはならなかったシャミッソー自身の苦悩の姿であるという。シャミッソーは、「私はフランスではドイツ人にみられ、ドイツではフランス人にみられる¹⁹⁾」と書き残している。そして彼は、偶然にも不思議な七里靴を手に入れたシュレミールに、「突然、将来がみえてきました。かつての罪によって人間の社会からは締め出されましたが、そのかわりにいつも好きであった自然が私に与えられました。大地が豊かな庭として、研究が

人生の進むべき道であり、また活力として、学問が人生の目標として私に与えられました²⁰⁾」と語らせている。これはフランス・ドイツという二つの国を放浪した後、ベルリンでの自然研究に拠り所をもとめたシャミッソーの心中を表わしたものであり、七里靴をはいたシュレミールが行う世界旅行は、植物研究のため国境・国籍にはかかわらずに遠くへ旅することを願ったシャミッソー自身の願望であるという²¹⁾。

IV 地理学史からみた『ペーター・シュレミール』

『ペーター・シュレミール』の物語は、シャミッソーが植物を中心とした自然研究を開始してまもなく書かれたものである。祖国を失ったシャミッソーが、自然研究へのあこがれから書いたというこの小説を地理学史の分野から考察するなら、以下の3点に注目すべきである。

1 植物地理学の研究

第1点は、植物研究についてのシャミッソー自身の研究方針が打ち出されていることである。

小説『ペーター・シュレミール』の中には、「私の『両半球の植物史』は、『世界のフロラ』の大きな一断章であり、また私の『自然の体系』の一部をなしています。この中で私は、知られている種の数を三分の一以上も増加させただけでなく、自然分類と植物地理学にとってもいく分貢献したものと思っています²²⁾」とある。自然分類とは、薬効などを基準とした実用的な人工分類に対するもので、自然の秩序に従った植物の分類を意味している²³⁾。その後参加した世界旅行中に、シャミッソーは植物地理学の研究を考慮して調査地域のあらゆる種のリストを作成したこと、さらに帰国後、彼自身が植物の分類を行ったことについては既述のとおりである。以上の点を考えると、彼が1810年代から植物地理学の中でも分類学に基礎を置くフロラ地理学に関心をもつ

ていたことが明らかである。

それではシャミッソーは、植物地理学をどのように把握していたのであろうか。既述の著書『植物学と植物界についての諸相』の中で、彼は次のように述べている。「植物は地球をおおい、地域にその性格を与えている。たいていどんな土地の風景の特徴も、地球上の植物の不均一な分布に帰因している。われわれが植物地理学とよんでいる植物学固有の一分野の目的は、こうした植物の分布の法則性を調査し、自然地理学からその条件を実証することである²⁴⁾」。具体的には、植物の成育条件を気温と湿度にもとめ、緯度と高度に従った世界のフロラの記載を展開している。とくに彼は高山地域のフロラに注目し、「アルプスのフロラと高緯度北部のそれとを比較してみると、アルプスの植生の主要な要素となっている多くの種が、高緯度北部の地域にみられる。……アメリカの高い山脈は南北の方向にあり、この大陸の西部においては、ほとんど中断されずに北極地方から最も南の岬まで伸びる高い尾根を形成している。北方の冷涼な地帯と温暖な地帯に広くみられる植物形態は、この背にそって回帰線を越えている。メキシコの高地にはなお針葉樹林やカシの森があり、ペルーの山地にもカシがある。熱帯の高山地域のフロラには、北極地方でみられる多くの属が生じているが、しかし種は熱帯高地に固有なものである²⁵⁾」と述べ、南北および高度に従ったフロラの比較を行っている。

小説『ペーター・シュレミール』の中には、主人公シュレミールが友人シャミッソーの書齋を夢みる次のような場面が登場する。「……君は仕事机に向かっていました。机にはハラー、フンボルト、それにリンネの著書がひろげられていました……²⁶⁾」。三人のどの著書がひろげられていたのかについては触れられていない。そこで次にシャミッソーと、これら三人の自然研究者たちとの関係について考察したい。

リンネ (Linné, C. von) はスウェーデンの分類学者であり、1735年の著書『自然の体系』において雌雄蕊分類法に基づく植物分類を発表した。さらに彼は1753年発表の『植物種誌』の中で、一つの植物の種にいずれもラテン語からなる属名と種名とを併記するという二名式命名法を確立させ、学界に共通する植物命名法とした。彼の分類法および命名法が、現在の植物分類学にまで大きな影響を及ぼしていることは周知の事実である²⁷⁾。ところでシャミッソーの関心は、植物地理学の中でも分類学を基盤とするフロラ地理学であった。彼は世界旅行中に採集した多くの未知の植物を自ら分類し、命名した。著書『植物学と植物界についての諸相』の中には、リンネの分類法・命名法についての紹介と、18世紀の科学史上のリンネの位置づけが行われている²⁸⁾。以上の点を考え合わせると、シュレミールのみた夢の中で、シャミッソーは分類学の研究に不可欠なリンネの『自然の体系』や『植物種誌』をひろげていたものと考えられる。

シャミッソーは南北および高度に従った植物の分布上の差異に注目しているが、この点はハラー (Haller, A. von) とフンボルトの影響とみることができ。ハラーはスイス生まれの詩人であり、解剖学者であり、生物学者でもあった。彼は1728年にアルプスへの旅行を行い、翌29年には高度に従ってアルプスの植生が変化していく様子を歌った詩「アルプス」を発表した²⁹⁾。さらに1772年発表の『スイス植物史序説』においては、アルプスの高度に従った植物の変化を、ヨーロッパの南北に従った植物の変化と比較しながら以下のように論じている。「スイスにみられるさまざまな植物の種について考察していこう。こうした差異は位置、水の状態、そしてたいていは気温に依存している。スイスには遠いスピッツベルゲンからスペインまでの、ヨーロッパのほとんどすべての土地が存在している³⁰⁾」。彼によるとスイスでは、アルプスの氷河や高い谷の周囲に

スピッツベルゲンと同じような植生が生じている一方で、ブドウ畑やクルミの木、小麦畑なども観察できるという。「したがって半日のうちに、一方では北緯80度の植物を、他方では北緯40度の植物を集めることができる³¹⁾」ことになる。

またフンボルトは1799年から1804年にかけて行ったアメリカ旅行中に、植物分布と気温の遞減法則との関係に注目した。フンボルトの植物学を専門にしていた生物学史家メイヤー-アービヒ (Meyer-Abich, A.) によれば、フンボルトの植物地理学上の最大の業績は植物分布上の三次元法則 (Gesetz der dritten Dimension) であった。すなわち赤道付近の山地における植物の分布は、赤道から極への植物分布にも相当するのである³²⁾。フンボルトはこれについて、「自然は熱帯の人間に、その土地を離れなくても世界のあらゆる植物形態をみせてくれる³³⁾」と表現している。フンボルトは単なる世界のフロラの記載が植物地理学であるとは認めていない。これらは植物地理学に資料を提供してくれるのである。フンボルトは植物分布に地理的配列の法則性を認め、他の諸現象との、すなわち高度や気温との内的関係に注目しながら、地域的に秩序立てて把握する必要性を主張した³⁴⁾。アメリカ旅行から得た植物地理学関係の成果は、1805年『植物地理学についての試論』(ドイツ語訳は1807年『植物地理学へのイデー』)、1806年『植物観相学へのイデー』、1808年『自然の諸相』などにまとめられた。

シュレミールは、シャミッソーがハラールの『スイス植物史序説』やフンボルトの上述の著書をひろげている夢をみたのであろう。同じく詩人であったからには、ハラールの詩「アルプス」もシャミッソーは知っていたであろう。しかしシャミッソーは、ハラールやフンボルトとは異なり、群落として相観上把握可能な植生ではなく、分類学をもとにしたフロラを常に問題にしていた。リンネの分類学を基礎としたフロラ地理学を中心としながら、その分析の視点は

ハラール、フンボルトと同じく生態学的であり、さらに高度や南北に従った植物の地域的配列の法則性に注目するというシャミッソー独自の植物地理学は、小説『ペーター・シュレミール』の夢の場面から、その起原を理解することが可能なのである。

2 フンボルトのアメリカ旅行

第2点としては、シュレミールが行う旅は、フンボルトのアメリカ旅行をモデルにしている点である。

七里靴を手に入れたシュレミールは、まずアメリカ旅行後のフンボルトが次の目標としていたチベットの高地に立った後、世界旅行を開始する。途中、ロンドンやパリでクロノメーター、六分儀、その他二、三の自然観測用器具をそろえ、これらを携えながら彼は世界を広く歩いた³⁵⁾。物語『ペーター・シュレミール』には、「私は世界をあちこち歩きまわりました。ある時は高度を、またある時は温泉の温度や気温を測定しました。ある時は動物を観察し、またある時は植物を調査しました。私は赤道から極へと急ぎ、ある世界 (Welt) から他の世界へと急ぎました。そして経験したことを互いに比較しました³⁶⁾」とも、また「私は長靴が及ぶ限り、地球とその形態、高度、気温、大気の変化、磁力による諸現象、地球上の生物、とりわけ植物界について、今まで誰もやらなかったほど徹底的に調査しました。そして事実をできるだけ正確に、秩序立てて何巻かの著書に編集し、結論や見解をいくつかの論文にす早くまとめました³⁷⁾」とも記されている。

フンボルトは1799年6月にアメリカ旅行へ出発するのであったが、その直前に実施したスペイン旅行の際にも常に六分儀・クロノメーター・バロメーター・温度計を用いて観測を行った³⁸⁾。これらの器具は彼の必需品であった。アメリカ旅行中のフンボルトの日課は、植物地理学上の観察と地球物理学上考えられるあらゆる観測、そして地理的位置の決定を行うことであった³⁹⁾。もちろんこの他にも、彼は動

物や鉱物を観察・蒐集し、火山を始めとした地形・地質、さらには人文関係の調査をも実施した。従来フンボルトのアメリカ旅行の最大の成果は、地磁気の観測と植物地理学分野の確立にあるとされている⁴⁰。調査旅行の一環として計画的に地磁気を測定したのは、科学史上フンボルトが最初である。アメリカ旅行中、彼は磁気力の強さが場所によって変化することに気付き、地磁気の強さが両極から赤道へ移るにつれて規則的に減少することを発見した⁴¹。さらに彼は既述のように、赤道付近の山地における植物分布と気温の遞減法則との関係に注目し、「…深いシワが刻まれたアンデス山脈では、あらゆる植物形態を同時にながめることができる。…そこでは気候が、気候によって決定される植物地帯と同様に相互に層状に重なり…気温の遞減法則が山の斜面に沿ってアンデス山脈の岩壁へ永遠の特徴を刻み付けている⁴²」と述べている。

フンボルトはシュレミールのように「赤道から極へと急いだ」わけではない。しかし結果的には、地磁気の成果も、また植物地理学上の成果も、「赤道から極へと急ぎ、ある世界から他の世界へと急ぎました。そして経験したことを互いに比較しました」というシュレミールと同じ方法を採用していたことになる。フンボルトは大規模にも小規模にも、常に比較を試みた。彼は比較を行うマイスターであった⁴³。

アンデスを越えてキトに到着したフンボルトは、次にエクアドルの火山地域の観察を行っている。彼は、当時世界の最高峰であると考えられていたチンボラソ山を始めとし、ピチンチャ山、コトパクシ山などエクアドルのいくつもの火山に登り、後にはメキシコにおいてもポボカテペトル山やオリサバ山などの火山の観察や、温泉の測定を実施した。こうした観察をもとにし、フンボルトは火成論の立場を確立させた⁴⁴。フンボルトはアンデスやメキシコの山々のスケッチを多数残しているが、既述の『植物地

理学についての試論』（ドイツ語訳『植物地理学へのイデー』）の中に収められ、とりわけよく知られている「アンデスの自然画 (Naturgemälde)」には、山頂を雪でおおわれたチンボラソ山と、同じく雪でおおわれた山頂から煙を上げるコトパクシ山が描かれている⁴⁵。『ペーター・シュレミール』にはこれらの山々に沿って、シュレミールが南北アメリカを越える次のような場面が登場する。「私はホーン岬から北へ戻り…山系に沿って両アメリカを越えて行きました。この山系には地球上で最も高く、よく知られた山々があります。私はゆっくり注意しながら、山頂から山頂へと歩きました。しばしばや々と息をしながら、ある時は炎をあげる火山を越え、またある時は雪におおわれた山頂を越えました⁴⁶」。

フンボルトは1804年に、5年間にわたる大旅行を終えてパリに帰った。シュレミールは調査結果を「できるだけ正確に、秩序立てて何巻かの著書に編集し、結論や見解をいくつかの論文にす早くまとめた」が、フンボルトは旅行中すでに観測結果の一部を論文として発表した。また彼はキューバを旅行中の1801年に、多方面にわたる調査記録を数巻からなる報告書に分類してまとめる構想をもっていた⁴⁷。この構想は最終的には『熱帯の赤道地方への旅行』30巻となり、これらは1805年から34年にかけて刊行された。このうち最初に出版されたのは『植物地理学についての試論』であり、30巻中の第27巻に当たる。シュレミールの言葉を借りるなら、フンボルトは調査結果を「できるだけ正確に、秩序立てて30巻の著書に編集した」ことになる。旅行の成果はまた1808年刊行の『自然の諸相』などの著書や、多くの論文にまとめられた。すでに述べたようにシャミッソーは1810年にパリで、『熱帯の赤道地方への旅行』の編集に多忙なフンボルトと実際に会っている。フンボルトと同じく植物を中心とした自然研究者の道を歩み始めたシャミッソーが、シュレミールの旅のモデルにフンボルトのアメリカ旅行を選ぶのも想像

に難くない。

3 19世紀初頭の自然観と地理的知識

第3点は、シュレミールが行う旅行には、当時のヨーロッパの人々の自然観と地理的知識が反映されている点である。

シュレミールは世界を広く旅した結果、「アフリカの内陸部、北極地方、アジアの内陸部と東海岸の地理を確定した⁴⁸⁾」ことになっている。しかしシュレミールは、ヨーロッパの人々にとってこれらの地域と同じく未知であったオーストラリアと南太平洋の島々へはどうしても渡れずに、「地球と、太陽によって織りだされた地球の衣服にあたる植物界や動物界を理解するために、基本的に不可欠であり注目すべきであるオーストラリア (Neuholland) と南太平洋の島々 (Zoophyteninseln) は、私を近づけてくれません。私が採集し、明らかにしようとしたことすべてが、すでに最初から単なる断片のままになってしまいました⁴⁹⁾」と悲嘆にくれるのである。

当時のヨーロッパ科学界においては、クック (Cook, J.) の3回にわたる太平洋の旅行 (1768～1771, 1772～1775, 1776～1779) によって、オーストラリアや南太平洋の島々にはヨーロッパでは知られていない目新しい動植物の種が存在することが報告され、これらの地域への関心が一層高まっていた⁵⁰⁾。シュレミール、いやシャミッソーにとっても、世界のフロラの研究には欠かせない地域であると同時に、「南太平洋の島々」に “Zoophyteninseln” を使用していることから明らかなように、「失われた鎖 (missing links)」を秘めた魅力ある地域でもあった。“Zoophyt” とは「植物性動物」を意味し、この時代のフランスの生物学者キュヴィエ (Cuvier, G.) によって植虫に与えられた名である⁵¹⁾。植虫とは、アリストテレス (Aristoteles) 以来のヨーロッパの自然観の中心をなすいわゆる「存在の大いなる連鎖 (great chain of being)」において、人間を頂点とした動物と植物とを結びつける位

置に存在すると考えられていたものである。18世紀には淡水ポリプであるヒドラが発見され、アリストテレスによって主張された漠然とした植虫の存在は、いよいよ確実となった⁵²⁾。さらに太平洋の島々についての知識が増加するにつれて、珊瑚ポリプもまた動物と植物との間の欠けてしまった鎖に相当するものとして注目を集めた。“Zoophyteninseln” とは、こうした珊瑚ポリプが多く存在する「南太平洋の島々」を指している。シャミッソーは後にこれらの島々を実際に観察する機会を得たわけであるが、帰国後彼は珊瑚ポリプについて、「その体は動物であるが、植物のようにただ生きているという生活を送ることができる⁵³⁾」と述べている。18, 19世紀に行われた調査旅行のもう一つの目的は、常にこうした「失われた鎖」を探しとめ、「存在の大いなる連鎖」を完全なものにすることであった。科学者だけでなく、一般大衆が調査旅行に対して抱く期待もこの点にあった⁵⁴⁾。1845年出版のフンボルトの『コスモス, I』においてさえ、「……存在間の割れ目は埋められている。……長い間不可解であったことは、しばしば極めて遠く隔たった地域への徒歩旅行の際に行われた観察を通して明らかにされている。長い間孤立していた植物と動物は、新しく発見された中間物を通して、あるいは漸移形態を通して相互に連なった⁵⁵⁾」とあり、「失われた鎖」に対する当時のヨーロッパの人々の関心の強さを知ることができる。

シュレミールはベーリング海峡を跳び越えてアジアとアメリカを行き来し、またヨーロッパからグリーンランドを通過してアメリカへ渡った。その彼が、マラッカ半島からスマトラ島、ジャワ島、バリ島、そしてロンボク島までしか行くことができなかった。彼はここからどうしてもオーストラリアや南太平洋の島々へ渡ることができなかった。このことは、オーストラリアと南太平洋の島々が、自然研究者にとって研究上重要な地域であることが認識され

ていたにもかかわらず、ヨーロッパの人々にとっては陸続きで行くことのできるアジア内陸部や東部、アフリカ内陸部、北極地方よりも一層遠く、一層未知であったことを示しているといえよう。オーストラリアの海岸線が途切れることなく知られるようになるのは、1820年代のことである⁵⁶⁾。

さらに、シュレミールは世界を広く旅行したことになるが、『ペーター・シュレミール』には南極大陸が出てこないのである。クックは第2回の太平洋航海で初めて南極圏を越え、南極大陸を周航した。しかし大陸の存在を確認するまでには至らなかった。この航海に参加した自然研究者フォルスター (Forster, J. R.) の報告書につけられた地図によると、大陸ではなく「南の氷の海 (Südliches Eismeer)」が存在することになっている⁵⁷⁾。ヨーロッパにおいて南極大陸の存在が知られるようになるのも、1820年代初期のことである⁵⁸⁾。シャミッソーにとって南極は、オーストラリアや南太平洋の島々よりもさらに未知であった。

V 結 び

以上、19世紀の初期に文学から自然研究までの幅広い分野で活躍したフランス系ドイツ人シャミッソーが著した小説『ペーター・シュレミール』について、地理学史の分野からの考察を試みた。現在この作品は、ドイツ・ロマン主義文学の傑作の一つに数えられている。ロマン派に特有なメルヘン風の『ペーター・シュレミール』の物語は、従来いわれるように、植物を中心とした自然研究を始めたばかりの著者シャミッソーの願望を表わしているにはちがいない。彼は世界周航の出発に際し、「今や、『シュレミール』の中でみた明るい夢が現実となったのである⁵⁹⁾」と書き残している。しかしそれだけでなく、この作品はまさに19世紀初期のヨーロッパの人々の自然観や地理的知識、そして地理学を中心としたヨーロッパ科学界の成果を忠実に映し出している。シ

ャミッソーのみた明るい夢は、自然科学者の極めて現実的なメルヘンであった。

(1985年9月30日受付)

(1986年2月22日受理)

注および文献

- 1) Chamisso, A. von (1980): *Peter Schlemihls wundersame Geschichte*. Reclam, Stuttgart, 84S.
- 2) 井汲越次訳 (1936): 『影を失くした男』岩波文庫。
池内 紀訳 (1983): ペーター・シュレミールの不思議な物語。『ドイツ・ロマン派全集 第5巻 フケー、シャミッソー』国書刊行会, pp. 233~332。
池内 紀訳 (1985): 『影を失くした男』岩波文庫, 153p.
- 3) Beck, H. (1971): *Grosse Reisende. Entdecker und Erforscher unserer Welt*. Callwey, München, S. 161~189.
- 4) Hettner, A. (1927): *Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden*. F. Hirt, Breslau, S. 78.
- 5) 前掲 3)。
- 6) Chamisso, A. von (1983): *……und lassen gelten, was ich beobachtet habe. Naturwissenschaftliche Schriften mit Zeichnung des Autors*. D. Reimer, Berlin, S. 9.
- 7) 手塚富雄 (1963): 『ドイツ文学案内』岩波文庫別冊 3, p. 158.
- 8) Chamisso, A. von (1971): *Gedichte und Versgeschichten*. Reclam, Stuttgart, S. 20.
- 9) 前掲 3), S. 163~165.
- 10) Beck, H. (1961): *Alexander von Humboldt. Bd II: Vom Reisewerk zum "Kosmos" 1804~1859*. F. Steiner, Wiesbaden S. 30.
- 11) 前掲 3), S. 164.
- 12) 前掲 1), S. 164。
池内 紀 (1985): 前掲 2), p. 127, p. 145.
- 13) 前掲 3)。
- 14) 前掲 6), S. 16.
- 15) 前掲 6), S. 7.
- 16) 池内 紀 (1985): 前掲 2), p. 145.
- 17) 前掲 6), S. 20.
- 18) 河内信弘 (1970): 西欧文学にみられる 影あるいは分身——ポオ、シャミッソー、ホフマンの作品考——。現代科学論叢, 4, pp. 39~47。
河内信弘 (1975): 影——“Peter Schlemihls wun-

- dersame Geschichte”について。駒沢大学外国語部論集, 4, pp. 73~88.
- 池内 紀(1983): シャミツソーと影。『ドイツ・ロマン派全集 第5巻 フケー, シャミツソー』国書刊行会, pp. 351~358.
- 池内 紀(1985): 前掲 2), pp. 137~143.
- 19) 前掲 6), S. 238.
- 20) 前掲 1), S. 71.
- 21) 前掲 1), S. 84.
- 池内 紀(1985): 前掲 2), p. 147.
- 22) 前掲 1), S. 78.
- 23) 中村禎里(1973): 『生物学の歴史』河出書房新社, pp. 121~125.
- 24) 前掲 6), S. 191.
- 25) 前掲 6), S. 192, S. 203.
- 26) 前掲 1), S. 25.
- 27) Ch. シンガー著, 伊東俊太郎・木村陽二郎・平田寛訳(1968): 『科学思想のあゆみ』岩波書店, pp. 423~425.
- 28) 前掲 6), S. 209~220.
- 29) Haller, A. von (1965): *Die Alpen*. Reclam, Stuttgart, S. 101.
- 30) Beck, H. (1973): *Geographie. Europäische Entwicklung in Erläuterungen*. K. Alber, Freiburg, S. 142~143.
- 31) 前掲 30), S. 143~145.
- 32) Meyer-Abich, A. (1970): *Die Vollendung der Morphologie Goethes durch Alexander von Humboldt*. Huber, Göttingen, S. 162~163.
- Meyer-Abich, A. (1967): *Alexander von Humboldt*. Rowohlt, Reinbeck, S. 145~150.
- 33) Humboldt, A. von (1969): *Ansichten der Natur*. Reclam, Stuttgart, S. 80.
- 34) Beck, H. (bearbeitet) (1978): *A. von Humboldt Kosmos für die Gegenwart*. Brockhaus, Stuttgart, S. 34~35.
- 35) 前掲 1), S. 73.
- 36) 前掲 1), S. 74.
- 37) 前掲 1), S. 78.
- 38) Scurla, H. (1984): *Alexander von Humboldt. Eine Biographie*. Fischer, Frankfurt am Main, S. 104.
- 39) Meyer-Abich, A. (1967): 前掲 32), S. 68.
- 40) Meyer-Abich, A. (1967): 前掲 32), S. 67~68.
- 41) 前掲 27), p. 366, p. 373.
- 42) 前掲 38), S. 8.
- 43) 前掲 38), S. 223.
- 44) Meyer, A. (1967): 前掲 32), S. 93~94.
- 前掲 34), S. 80~81.
- 前掲 38), S. 155~158.
- 45) 野間三郎(1963): 『近代地理学の潮流——形態学から生態学へ——』大朋堂, p. 48.
- 46) 前掲 1), S. 72.
- この部分の原文は次のとおりである。“<前掲 1), S. 72> Ich …… trieb mich …… vom Kap Hoorn nordwärts zurück. …… Ich verfolgte durch beide Amerika die Bergkette, die höchsten bekannten Unebenheiten unserer Kugel in sich fasst.” “Bergkette” とは南北アメリカを貫くコルジレラ山系をいい, この山系には当時世界の最高峰と考えられていたチンボラソ山などの山々が含まれていることを意味している。池内<前掲 2), 1983, p. 31, 1985, p. 110.>はこの部分を「ホーン岬でとって返して… … 北にもどりました …… 南北アメリカの両大陸をつらぬいてのびているロッキー山脈縦走をくわだてました。地球上にあってもっとも複雑な山系踏破を考えたのです」と訳しているが, 誤訳である。
- 47) 前掲 10), S. 5~6.
- 48) 前掲 1), S. 78.
- 49) 前掲 1), S. 72~73.
- 50) 前掲 27), p. 441.
- 51) 前掲 1), S. 83.
- 52) Lovejoy, A. O. (1964): *The great chain of being*. Harvard University Press, Cambridge, p. 233.
- 53) 前掲 6), S. 156.
- 54) 前掲 52), p. 236.
- 55) 前掲 34), S. 23.
- 56) チャールズ・ブリッカー著, 矢守一彦訳(1981): 『世界古地図』日本ブリタニカ, p. 265.
- 57) Forster, J. R. (1981): *Beobachtungen während der Cookschen Weltumsegelung 1772~1775*. Brockhaus, Stuttgart, 560S.
- 58) 吉田栄夫(1983): 南極。福井英一郎編『世界地理 12. 両極・海洋』朝倉書店, p. 32.
- 59) 前掲 3), S. 167.

Adelbert von Chamisso und sein Werk “Peter Schlemihls wundersame Geschichte”

Momoyo TAMURA

Adelbert von Chamisso (1781~1838) war Dichter, Geograph und Forschungsreisender. Er wurde auf Schloss Boncourt in der Champagne geboren und fand seine zweite Heimat in Berlin. Chamisso blieb in Paris 1810 bis 1812, und hier besuchte er A. von Humboldt mehrere Male. Humboldt war damals der berühmteste Naturforscher in Europa und Amerika und arbeitete an der Herausgabe seines amerikanischen Reisewerks. Das Kernstück des Reisewerks ist der Essay über die Pflanzengeographie, und dieser Essay erschien schon im Jahr 1805. Im Jahr 1812 begann auch der einunddreissige Chamisso ein systematisches Studium über Naturwissenschaften, besonders Pflanzenlehre, auf der 1810 gegründeten Universität Berlin. Er schrieb den Roman “Peter Schlemihls wundersame Geschichte” im Sommer 1813 und gab dieses Manuskript an seinen Freund F. de la M. Fouqué ab. Im nächsten Jahr veröffentlichte Fouqué “Peter Schlemihl” ohne Chamissos Erlaubnis ver. “Peter Schlemihl” ist heute eines der besten Werke in der deutschen romantischen Literatur.

Dieses Werk erzählt von einem Mann, der dessen Schatten verlor. Eines Tages verkaufte die Hauptperson Peter Schlemihl eigenen Schatten an den Teufel für den Glückssäckel. Er wurde reich, aber er wurde von der menschlichen Gesellschaft ausgeschlossen, weil er seinen Schatten nicht hatte. Er entschloss sich, Arbeit unter der Erde zu finden, und er ging nach einem Bergwerk. Auf dem Weg kaufte er sich ein Paar Stiefel und zwar ein paar Siebenmeilenstiefel. Danach hatte Schlemihl Siebenmeilenstiefel an den Füßen, und er streifte auf der Erde umher, ihre Höhen, ihre Temperatur und ihre magnetische Kraft messend, Tiere und Gewächse beobachtend. Ausser Australien, der Südsee und Antarktis durchforschte er alle Länder mit dem Chronometer, dem Sextanten und anderen physikalischen Instrumenten. Er stellte die Tatsachen in Ordnung in mehreren Werken auf. Schlemihl leistete einen Beitrag zur Entwicklung der Pflanzengeographie und Pflanzensystematik.

Schlemihl sprang von Amerika über die Beringstrasse nach Asien, und von Afrika über die Strasse von Gibraltar nach Europa. Er trat von Europa über Grönland nach Amerika

über. Zwar streifte er auf der Erde umher, aber er reiste nicht nach Australien, die Südseeinseln und Antarktis, obwohl er Siebenmeilienstiefel hatte. Das bedeutet, dass die Entschleierung dieser Länder beträchtliche Fortschritte damals noch nicht machte.

Für Schlemihls Forschungsreise dient Humboldts Amerikareise (1799~1804) als Modell. Auf seiner Amerikareise bildeten pflanzengeographische Beobachtung, geophysikalische Messungen und geographische Ortsbestimmungen Humboldts ständiges Tagewerk. Er brauchte den Sextanten, das Chronometer, das Barometer und das Thermometer für seine mannigfaltigen Naturforschungen. Sein amerikanisches Reisewerk erschien in dreissig Bänden zwischen 1805 und 1834. Die Begründung der Pflanzengeographie geht auf Humboldt zurück.

Für seine botanischen Studien wünschte sich Chamisso auch schon lange Siebenmeilienstiefel. Das Werk "Peter Schlemihl" bedeutet nicht nur Chamissos Wünschentraum, sondern auch spiegelt die Ergebnisse der Naturwissenschaften, besonders der Geographie, des Anfanges des 19. Jahrhunderts wider.